

京極読書新聞 <第46号>

発行日 平成25年 6月 1日(土)
京極町生涯学習センター湧学館

出前図書館、全読書会、動き出す!!

五月の風とともに、京小、南京小への出前図書館が始まりました。どちらにも共通しているのが、今年度最初の一冊が新美南吉「ごんぎつね」だったこと。どうして? 答えは、お子さんに聞いてみてください。



今年の読書会。第2週の金曜夜6～7時が「沼田流人」読書会、7～8時が「山麓文学館」のダブルヘッダー体制です。読書会に、作家の大沼桂子さんから小説「多与」15冊の寄贈がありました。湧学館の蔵書にも1冊入っています。東俱知安村(昔の京極の名)も舞台となっている小説ですので、興味を持たれた方は湧学館へ。



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

2013 京中生に インタビュー

第2回

今年度は、いつもにも増して、レベルの高い読書感想文コンクール受賞作品が揃いました。湧学館もインタビュー時間を長くして話を聞いて行きたいと考えています。<編集部>

東倉志穂さん(1年) 「犬やねこが消えた」 磯田知花さん(1年) 「氷の海を追ってきたクロ」

———中学校の新しい生活、どうですか？

磯田 小学校の時にはなかった「行事」がいっぱいあって、とても新鮮です。

東倉 小学校にはなかった「勉強」もおもしろいです。

———去年度の読書感想文コンクールは、受賞作品の半数くらいが「犬」の物語という変な年でもありました。本当に、東日本大震災で迷子になった犬の話から、今日のお二人のような戦争下の犬まで、さまざまです。

東倉 私は「犬やねこが消えた」というタイトルの不思議さにひかれて、この本を選びました。なぜ、犬や猫の命がうばわれなければならなかったのか？と思ったからです。

———まさか、兵隊さんの防寒着の毛皮とはね。びっくりしました。

東倉 戦時中、動物園のゾウや猛獣たちの命がうばわれたことは教科書で知っていました。また、戦争中の「供出」で、鉄製品の他にも、軍馬や軍用犬用に多くの馬や犬が戦場に連れ出されていったことも知っています。でも、軍用犬以外にも、こんなにも多くの犬や猫が犠牲になっていたことに本当に驚きました。この本を読むと、戦争の恐ろしさが伝わってきます。

———この「犬やねこが消えた」の中にも、「マリ」という名の犬が登場します。第5章の「犬をわたさなかった人たち」のところで、「マリ」の物語がどんどんふくらんで行きます。(先月号、参照)

ところで、磯田さんはどうしてこの「氷の海を追ってきたクロ」を選んだのですか？

磯田 私は、どの本にしようか湧学館で迷っているときに、東倉さんから薦められました。第二次世界大戦後、厳しい寒さのシベリアに捕虜となって抑留され、十年以上にわ

たってラゲリで強制労働をさせられていた人たちにとって、一匹の子犬が与えてくれた生きる希望は本当にかげがえのないものだったろうと思います。

———背表紙にも使われている、あの一枚の写真がいいですね。

磯田 クロを抱いて、みんなで写っているラゲリの写真です。動物も人の命も重さは同じだということを教えてください。

———クロも、生きて日本に帰らなければならぬ大事な仲間なんですね。

磯田 毛布にクロをつつんで帰国船に乗り込んだまではよかったのですが、クロが吠えたためバシてしまいます。船外に捨てられたクロは、それでも氷の上を必死に渡りながら船を追いかけてきます。このお話の中で、私がいちばん感動した場面でした。



左：磯田知花さん(1年) 「氷の海を追ってきたクロ」 井上こみち・文 ミヤハラヨウコ・絵 (学研, 2010.12)	右：東倉志穂さん(1年) 「犬やねこが消えた」 井上こみち・文 ミヤハラヨウコ・絵 (学研, 2008.8)
--	--

西村元太くん(2年)「影との戦い」

新谷保人(湧学館)

新谷 私も昔からの「ゲド戦記」のファンなので、今回だけは、単なる聞き手以上に踏み込んで話に参加させてもらいます。中学生で「ゲド戦記」を読む人があらわれて、とてもうれしい。

西村 「ゲド戦記」との出会いは小学生の時です。小学5年の時のクリスマス・プレゼントが岩波少年文庫版(全6巻)の「ゲド戦記」でした。

新谷 なるほど。あの最優秀賞をとった読書感想文、第1巻の「影との戦い」だけを読んで書いた感想文じゃないなとは思っていたんだけど、やはり、全巻読んでいたんですね。小学校高学年というのはすごいな。おじさんなんか、社会人になってからです。

これが、現在、「ゲド戦記」と呼ばれている全6巻の並びです。「影との戦い」～「こわれた腕環」～「さいはての島へ」～「帰還」～「ドラゴンフライ」～「アースシーの風」の全6巻。でも、おじさんたちが読み始めた1980年代では、「ゲド戦記」は全3巻の物語だったんです。

西村 表紙の絵柄がばらばらですよ。

新谷 そうです。絵柄が揃っている最初の3冊、「影との戦い」～「こわれた腕環」～「さいはての島へ」の組み合わせが昔の「ゲド戦記」でした。

西村 第2巻「こわれた腕環」などが典型的なんですけど、話が、ゲドとはまったく関係ないテナーの話からはじまって、中盤でようやくゲドが登場して、そうか！この話はこっちへつながってゆくのか、この人はこの人につながっていたのか！とか、「ゲド戦記」の世界がぐんぐん広がって行く感じが大好きです。

新谷 全3巻だった時代でストップしている人の特徴は、一言で言えば「カッコいいゲド」ってことでしょうね。西村くんの感想文がいいのは、きちんと第4巻「帰還」を読んでいるという点なんです。

西村 ああ、そうか。

新谷 1990年に大事件が起こりました。作者のル＝グィンが、第3巻「さいはての島へ」の発表から18年も経った1990年に突如第4巻「帰還」を発表したんです。しかも、そこに描き出されたゲドは、もう魔法を使う力も失った、ただの老いぼれたゲドだったものだから、ファンの間からは悲鳴があがりました。「こんなみじめたらしいゲドを見たくない！」と。

西村 そうだったんですね。ぼくも、この「帰還」には思い出があって、物語の始まりこそとんでもない姿のゲドだけど、物語の途中でかつての力を取り戻して、昔の英雄ゲドが復活するのだろうと思っていたのですが、そういう奇跡は最後まで起こらなかったことが印象的でした。

新谷 「影との戦い」みたいな展開は二度とはやって来なかったんです。でも、この「帰還」の登場は新たなファン層を生み出すことにもなりました。もはや、ル＝グィンを単なるファンタジーSF作家とか児童文学作家と思っている人はいないと思います。ル＝グィンにしかできない独特の世界観を持った大した作家だと誰もが認めることとなりました。

西村 「ドラゴンフライ」や「アースシーの風」は、「帰還」のさらに後の出版になるんですか？ ぼくは、第5巻「ドラゴンフライ」の中にちらっと若き日のゲドの姿が出てきて、そこから最終巻「アースシーの風」の物語に入っていくという展開が大好きなんですけど。



前ページからの続きです。

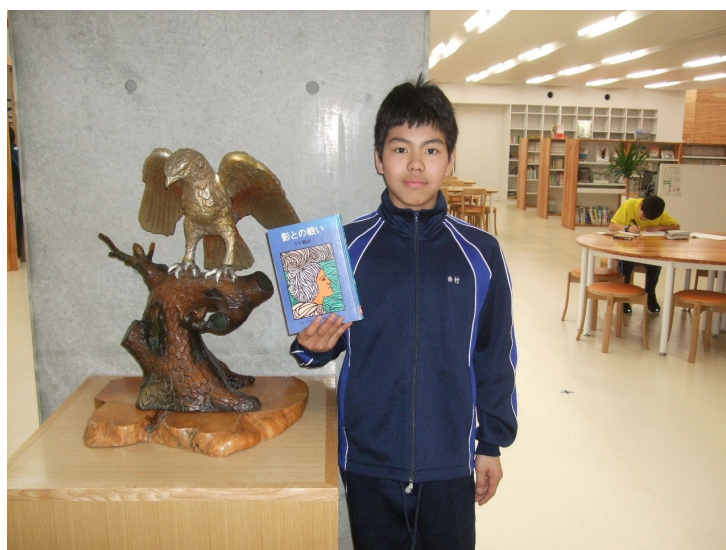
新谷 それは面白い読み方ですね。おじさんたちの時代にはなかった読み方で、とても興味深い。「アースシーの風」の出版は、「帰還」からさらに11年が経った2001年です。その時もみんなびっくりしました。けれど、納得もしたんです。タイトルが「アースシーの風」だったから。日本では「ゲド戦記」って訳されているけれど、もともとは、この本の原題は「アースシー」です。アースシーという物語世界の年代記なのです。そこにこのタイトル「アースシーの風」を持ってくるわけですから、私なんかは、おそらくこれが最終巻なのだろうと思っているのですけど。「ドラゴンフライ」は、昔は「ゲド戦記外伝」と呼ばれていました。第1巻「影との

戦い」から最終巻「アースシーの風」までの正伝に対して、いわば別巻、おまけの付録みたいな感覚で読んでいましたね。第4巻「帰還」につなげて、第5巻「ドラゴンフライ」として読むという発想はなかったなあ。

西村 岩波少年文庫版以降の読み方なんですね。こういう、物語も、作者も、読者も、時代とともに変化・成長して行ってるの、とっても面白いです。

新谷 私も、「京中生インタビュー」今まで続けてきて本当に良かったと思いました。「ゲド戦記」の話が若い人とできるとは思いませんでした。さて、記念写真、撮りましょうか。場所はもちろんあそこですね。

西村 「ハイタカ」ですから。



西村元太くん（2年） 「影との戦い」 ルーグィン作 （岩波書店、1976.9）

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

